



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano ©転載許可済
©1980 精進教育促進協会(神戸三・三四五二芦屋市船戸町12-6)

教皇様の敵

私たちの将来

世界中の子供たち

クリスマスは子供の祝日

「私たちのために、ひとりのみどり子が生まれた、ひとりの子が与えられた。」(イザヤ9・5) きょう、わたしたちはみな、心からベトレヘムの初子に思いをはせます。また同時にすべての赤児、すべての人の子、すべての新生児に思いを寄せます。まだ生まれていない赤児、それに、生まれたばかりのみどり子、ついで微笑んだり、話したり、ものがわかりかけたりはじめた子供たち、さらに、小学校に入る準備をしている子ども、また将来のために学校で勉強に励んでいる子供など、このことを思っています。

クリスマスは、民族も、国籍も、ことばも、出身も越えた、子供たちみんなのもの、世界中の子供たちの祝日なのです。キリストは、ありとあらゆる子供たちのために、ベトレヘムでお生まれになりました。ですから、キリ

ストは、子供たち一人ひとりを代表して下さっているのです。キリストはこの地上での第一日目から、あらゆる子供ひとりひとりについて話して下さっています。それは、貧しい母から生まれた御子の第一声であります。キリストをお生みになったのち聖母は「布に包んでまぐさおけに子を横たえた。宿屋に部屋がなかったから(ルカ2・7)なのです。

子供たちの権利

一年が終わりまさに新しい年が始まろうとするいま、子供一人ひとりの権利について、子供の尊厳について、私たちの生活の営みのなかで子供が果たす役割について、御子に話していただきましょう。どの家庭でも、どの国でも、人類全体をみた場合にも、子供たちがいかに大切な意味をもっているかを教えてください。

創造主はいのちを与えてくださいました、

子供はそのいのちの意味をふたたびあきらかにしめしてくれま。子供は、はじめから人の心に刻まれていた神のかたどり、似姿をあらたに確認してくれるのです。

子供は、わたしたちが自分自身に忠実であるかいなか、人類全体に対して忠実であるかいなかをしめす大切な試金石であります。懐胎の瞬間に私たちのいのちは神のかたどり、似姿をうけます。子供はまた、この生命の神秘に対する畏敬の念をもつかいなかをしめすテストでもあります。

両親と社会は、子供の尊厳を守るため、繊細で「敏感な良心」をもつよう求められています。家族に関する道徳、したがって、国や社会全体の道徳というものは、かよいい存在である子供の尊厳が守られるかどうかによって、育てられたり、破壊されたりするものであるからです。

両親には、子供の尊厳を保つためにこのうえなく重い責任がかせられています。また社会のどの部分に位置する者もこの責任をおわなければならない(…)。

兄弟愛と平和の世界

ベトレヘムの馬小屋に戻って、ふたたび、かいはおけに目をやります。そして、お生まれになったばかりの御子を通して、世界中の子供たちに語りかけるのです。

あなたたちこそわたしたちの愛、私たちの将来である。もっているものの中で一番良いものをあなたたちに渡したい。より善く、より正しい世界、兄弟愛と平和の世界をうけつがせたい。

古い時代からたくわえられてきた文明の遺産、幾世代もの仕事の成果をあなたがたに受け継がせたい。

そして、何よりもまず、最高の財産、くちることのない贈り物、あのベトレヘムにお生まれになった御子よりいただいた宝を、あなたがたに贈りたいのです。

みんな主のもとへおいでなさい、世界中の子どもたちよ、ありとあらゆることばや方言でうたおう。

初子をたたえて歌おう。喜びをふれ歩きましょう。

このうえないよろこび、あなたたちの祝日の喜びを大声で伝えるのです。

(一九七九年のクリスマス・メッセージ)

『教皇様の声』を読もう

教皇さまの教えをよく知って
教皇さまのご来日に応えよう

- ◎日曜日毎の「お告げの祈り」のときや水曜日毎の一般謁見のときを始め、教皇さまはあらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。
- ◎ところで教皇さまは直接きくことのできる人だけでなく私たちみんなのために話して下さいます。
- ◎教皇さまの教えをよく知っておくためには、教皇さまのおことばや勧めをたえず読まなければなりません。
- ◎「教皇様の声」はこのように目的のために生まれました。教皇さまのおことばを毎月そのままと伝えします。
- ◎「教皇様の声」はまた、教皇さまの心に近づき、より一層教皇さまを愛するためであります。
- ◎教皇さまのお話の要約は、すぐに入手できますが、おことばをそのまま読む方がよいのではないのでしょうか。
- ◎「教皇様の声」を毎月読み教えを知り、教皇さまのご意向に一致しよう。

年間購読申込方法

- ◎毎月配布されている教会等では教会へお申込みください。(年間購読料720円)
- ◎個人でお申込の方は1,440円(年間購読料720円+送料720円)を郵便振替にてお送りください。2部以上ご希望の場合、下記の送料が必要です。
- 年間送料 2~4部 840円・5~8部 2,040円
9~19部 2,880円・20部以上無料
(郵便振替 神戸072393 精進教育促進協会)
- ◎第1号からの在庫があります。同時にお申込みください。

三つの待降節

その時を待ちのぞみ
闘い競い合う時期

ヨハネ・パウロ二世教皇は十二月八日土曜日サンタ・マリア・マジョレ教会においてミサを捧げられた。無原罪の御宿りの祝日にあたってその祭儀を祝福されたのである。ミサにおいて教皇は説教された。

天地創造は神の来臨の第一歩

「わたしたちの主イエズス・キリストの父である神は、誉め称えられますように。神はわたしたちをキリストにおいて、天の霊的祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを聖なる者、汚れない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。(エフェゾ1・3と4)

聖パウロがエフェゾの信徒にあてた手紙を読むと、御降臨を待ちのぞむということの輪郭がはっきりしてきます。「永遠につづく待降節」こそが問題なのです。「天地創造の前」神御自身のうちで、それはすでに始まっています。天地創造自体神が人間に來臨されたもの第一歩、御降臨の最初の行為にほかなりません。「創世記」が証言するとおり、すべての目に見える世界が創られたのは実に人間のためなのです。神においては、世界と人間とを創造しようという計画、愛によって生まれた計画から、御降臨が始まります。この愛をあきらかにしてくれるのは、永久に消えることのない選択、すなわち人となられた「みことば」キリストにおいてわたしたち人間をお選びになったということです。

「天地創造の前、神はわたしたちを聖なる者、汚れない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。」

この永遠につづく待降節のあいだマリアは常にそこにいます。おん父がキリストにおいて選ばれた人びとのなかにあってもマリアは特別、異例な仕方選ばれました。キリストにおいて選ばれたのはマリアの場合その母となるためだったのです。世嗣の子にふさわしい人びとを「神は前もってお定めになりました」が、それ以上の配慮を重ねて神はマリアを前もってお定めになりました。「神がその愛する子によってわたしたちにお与えになった輝かしい恵み」を賞めたたえるための特別なしかたで、マリアは定められたのでした。(エフェゾ1・6参照)

マリアにはたいへん特別な恵みが与えられました。その崇高な荣誉は「永遠のみことばの母」たる務めを果たすことでした。この「母たる務め」を果たすためにマリアはキリストにおいて「無原罪の御宿り」の恵みも受けたのです。こうしてマリアは「みことばの御降臨」を待ちのぞむあの永遠の待降節のなかで、自らの役割を担って存在し続けています。その御降臨をあらかじめ配慮させたものは、創造と人間とに対するおん父の愛にほかならないのです。

主の来臨まで

「第二の待降節」には歴史的な意味あいもありません。それは最初の人間たちが没落した

あと救済者が到来するまでの時期です。この「待降節」についてはミサ典礼においても語られており、それによって、この待降節のそもその始まりからマリアがどのような場所を占めているのか、知ることが出来ます。実際、わたしたちの第一の祖先がおもいかげぬ恥ずべき振舞いをして、最初の罪が現われた時、そのとき神は世界の救済者について始めて啓示され、その母なる方をも告知されたのでした。これは言葉を通してのことでしたが、古来その言葉は「原福音」いわば福音の種子と見なされています。福音の、すなわち「よい知らせ」の最初の告知なのです。

これがそうです。「わたしは敵対をおく、おまえと女との間に、おまえの末と女の末との間に。かれはおまえの頭をふみ砕き、おまえはかれのかかとをかむであろう」(創世記3:15)

神秘に満ちた言葉ですが、古風な言いまわしのなかに、人類と教会の未来を明らかにしています。その未来のなかに予見されているのは「暗黒の霊」と「女の末」との間の闘争です。暗黒の霊とは「うそつきで、うそつきの父」(ヨハネ8・44)であるもの、そして女の末とは「道であり真理であり生命」(ヨハネ14・6)として人間たちの只中にやって来るはずの方なのです。

かくしてマリアは第二の歴史的な待降節の最初から、それに参加しています。マリアの出現は、その子である世界の救済者とともに約束されていたのです。その子ともども待ち望まれていたのです。待ち望まれている救世主エンマヌエル(「神われと共に在り」という意味ですが)、その方は「女の末」すなわち「無原罪のマリアの御子」なのです。

主の来臨によって

キリストの来臨によって成就されたのは第二の待降節だけではありません。第三の、そ

して最後の御降臨が啓示されましたのです。ナザレトのマリアのもとへ神は大天使ガブリエルをお遣わしにされましたが、ガブリエルの口からマリアの聞いた言葉はこうでした。「あなたは身ごもって男の子を産むが、その子にイエズスという名をつけなさい。その子は偉大な方で『いと高き者の子』といわれる……かれは永遠にヤコブの民を治め、その支配は終わることがない。(ルカ1・31と32) マリアは第三の待降節の始まりにいます。エフェゾの信徒への手紙で述べられていますが、あの永遠の選択を実現される方は、マリアを通して、この世に現れたものなのです。かれはその選択の実現をもって人類の歴史の終局となしたもう。その選択を実現する具体的な形として、福音・ご聖体拝領・みことば・秘跡を定めたもう。こうして人間の魂の生活のなかに、「教会」とよばれる特殊な共同体の生活のなかに、あの永遠の選択が一貫して強く浸み込むことになりました。

イエズス・キリストのおかげで世嗣とされた人びとの器量しだいで、人間の家族の歴史、人間ひとり一人の歴史は、立派にもなり大きくもなります。「わたしたちは、み心のままにすべてを行なわれる神の計画によって前もって定められ、キリストにおいて……生きる者とされました」(エフェゾ1・11)

この第三の待降節の始まりに在るのがマリアです。のみならずマリアはその待降節のあいだ常に、御降臨を待ちのぞむ人びとと共に在り続けているのです。(このことを驚くべきみことばで表現したのが、第二ヴァテイクン公会議の「教会憲章」です) 第二の待降節を通してマリアは「一層わたしたちに近しいものとなりました。マリアの『子』が『へびの頭を打ち砕き』給うたからでした。同じように第三の待降節にあっても、マリアがわたしたちから離れていくことはありません。それどころか常にわたしたちと共に在り、

説教・講話・書簡等の抄記

傍らにいてくれるのです。この待降節は、時が最終的に満ちることを、待ちのぞむだけの期間にすぎませんけれど、それは同時に競いあい闘いあう時期でもあります。あの最初の預言が生きています。「わたしは敵対をおく、おまえと女とのあいだに……」(創世記3・15)

違いは、その女の名をわたくしたちがすでに知っているということです。無原罪で宿られた方。乙女でありながら、しかも母となられたことも知っています。キリストの母にして教会の母、すなわち神と人間との母、御降臨を待ちのぞむわたくしたちの聖母マリアなのです。

「わたしは敵対をおく、おまえと女とのあいだに」という原福音の最初から、目には見えませんが、はっきり続いている呼びかけに従わ

『キリストの平和で心を満たし……』

聖家族は世のあがないの神秘

十二月三十日の日曜日カステル・ガンドルフォに集まった信者たちとお告げの祈りを唱えるに先だち教皇さまは述べられた。

1 今日の日曜日はクリスマスからまだ一週間も経っていないという喜びのうちにあります。しかも同時にナザレトの聖家族の祝日なのです。

神の子は乙女から生まれてこの世に來られました。その乙女の名はマリアといました。ベトレヘムで生まれナザレトで成長されましたが、それをひとりの義人が見守りました。その義の人はヨセフと呼ばれていました。

イエズスは始めから彼らの大きな愛を一身に浴び、こまやかな配慮と愛情に満たされてきました。かれらにとってイエズスは、神の召し出しであり、神の息吹であり、その生活

なければと、このわたくしは深く感じています。この難しい現代にあって、わたくしたちはいたる所での「敵対」を見ているのではないのでしょうか。わたくしたちにできること、願えることといえば、他でもない、「女の末」キリストとさらに強く結びあうことだけではないでしょうか。

御降臨の聖母

「無原罪のマリア」は「人の子の母」です。我らが御降臨の聖母よ、わたくしたちと共にいてください。そして、真理と希望、公正と平安を求めて闘う現代のこの困難な待降節の間、あの方がわたくしたちと共にいてください。聖母よ、おとりはからいください。ただあの方こそが、神と共に在る方、エンマヌエルなのですから。

病にふす人々へ

病で苦しむみなさん、私は主においてみなさんの苦しみを自分の苦しみとしてわがちあいたいと思います。福音書をよくご存知のみなさんはみなさんと同じ立場にいる人々に対してイエズスがどれほどの心づかいを示されたかご承知でしょう。キリストは「あまねく地方を巡って、善をおこない」、あらゆる種類の苦しみになやむ人々を「お治しになりました」。(使徒行録10・38)と、主ご自身が「苦しみの人」(イザヤ53・3)であり、人間の罪をあがなうためにご受難と十字架を甘えなされたのです。ですから、「すべて私たちと同様に味わわれ、われわれの弱さになつて」(へ

は本来聖家族のなかにあるのです。

2 ナザレトの聖家族の祭日にその日の典礼をとおして教会が世界のすべての家族に伝える願いは、一番すぐれた、一番熱のこもったものでありましょう。聖パウロがコロサイの信徒にあてた手紙から、わたくしが引用しますのはわずかに二つの文章ですけれど、大変内容の豊かなものです。

「キリストの平和で心を満たし、それに従って生活しなさい」(コロサイ書3・15)

実に平和こそ愛のしるし、家庭生活における愛を確認してくれるものです。平和こそ心の喜び、日々の仕事のなぐさめ。平和こそ、夫婦が互いに差しだしあう支えの手、子が親に、親が子に見出す支えの手であります。

こうした平和の願いを、世界のすべての家庭が受け入れてくださるようには。

そしてもう一つの願いもどうか受け入れてください。それは聖パウロの同じ手紙のなかで、さきに引いた言葉に続いて述べられる願いです。

ブライ4・15)くださる大司祭を思いだせば、大きな慰めを得ることが出来ます。キリスト信者は自分の苦しみをこのような観点からみなければならぬでしょう。聖パウロと共に「常に、イエズスの命が私たちの体にあらわれるようにと、イエズスの死のさまを自分の体に帯びている」(コリント後4・10)と言えなければなりません。そこで私は人間本来の姿を示す二つの根本的な面をしっかりとみつめるようお勧めしたいと思います。その一は洗礼を受けていること、その二は苦しみの人であること。使徒聖パウロのことは私たちが全員にもあてはまるからです。「真にキリストの苦しみが私たちに豊かであること、キリストによって私たちが慰めも豊かである」(コリント後1・5)みなさんの健康回復のためお祈りします。(一九八〇年九月)

「キリストの言葉があなたたちの内に豊かに宿るようにしなさい」(コロサイ3・16)

ことばは思想を表わすものであり、相互理解の手段です。親が子に授ける教育は、まず言葉を教えることから始まります。言葉によって知性と魂のおおいは取りのぞかれ、言葉が新しい人間のまえにひろげる道は、世界についての知識すなわち人間と神とについての知識にまで及びます。

言葉は、あらゆる人にとって、教育を受け成長するための基本的な手段です。

幸福と平和とを求めるとの願いはキリストのみ言葉の豊かさからあふれ出たものです。今日、世界のすべての家族がこの願いを聞き入れてくださいますように。そうすれば、キリストがご降誕とともにお渡しくださった命の力を、わたくしたちの子は、み言葉への信頼を通して、見つけ出すことができるでしょう。こうした意図をこめて、では今から聖母に祈りを捧げましょう。

(一九七九年十二月三十日)

不変の教え

使徒たちの使命

教えるキリストの姿は十二人と最初の弟子たちの心に刻みつけられていた。「行ってすべての民に教えよ」(マテオ28・19)と言う命令が彼らの全生涯を方向づけた。聖ヨハネはその証にイエズスの次の言葉を自分の福音書の中に報告している。「私はこれからあなたたちを僕とは呼ばない。僕は主人のすることを知らないからである。却って私はあなたたちを友と呼ぶ。それは、私が父から聞いたことをすべてあなたたちに知らせたからである。(ヨハネ15・15)イエズスに従うことを選んだのは彼らではなく、却って、イエズスが彼らを選んで、自分のそばに置き、復活の前から、彼らが行って、実を結び、その実がとどまるようにした。(ヨハネ15・16参照)復活の後に、すべての民を弟子とする使命を正式に彼らに与えたのはそのためである。

彼らがその受けた召命に忠実であったことは、使徒行録全巻がこれを証言している。最初のキリスト教共同体の信者たちは「絶えず使徒たちの教えを聞き、兄弟的に交わり、パンを割る式と祈りに従事していた」(使徒行録2・42)たしかに、ここには、使徒たちの教えを通して生まれ、そして主のことは絶えず養われて、そのみこばを聖体祭儀において行い、それを愛のしるしにおいて世に証する教会の変わらない姿が見られる。

しかし、使徒たちの敵は、その活動に不安を感じていた。彼らが民に教える「使徒行録4・2」のを不快に思い、イエズスの名で語ること教えることも一切禁じた。(使徒行録4・18、5・28)しかし、私たちは、この教える分野で、使徒たちが人間に聞くよりも神に聞くことが正しいと考えたことを知っている。(使徒行録4・19参照)(…)

教父たち

使徒たちとその最初の共働者の教える使命は教会によって続けられた。教会は自ら日々

主の弟子となることによって、当然「母かつ教師」と呼ばれている。実際、ローマの聖クレメンヌからオリゼネヌまでの使徒直後の時代にはすぐれた司教および司牧者たちが、口頭で教えること、あるいは要理教育書を編集することを司教職のより重要な務めの一つと考えた。それはエルサレムのチリルス、ヨハネ・クリゾストムス、アムブロジウス、アウグスチヌスが活躍した時代である。この頃、多くの教父たちによって、今でも立派な見本とされている著書が出された。

公会議と宣教活動

要理教育の任務は、常に公会議から新しい力を汲み取った。中でもトレント公会議はその見事な例を示している。すなわち、この公会議はその憲章と教令の中で、要理教育を

『要理教育に関する使徒的勧告』第二回 要理教育は教会同様古い経験

とくに重要視し、トレントの名を冠する『ローマ教要理』が編集されるきっかけとなった。これは司祭用の伝統的な教理および神学の要約として第一級の著作である。

要理教育は教会の権利と義務である

何よりもまず、要理教育が常に教会の神聖な義務であり、放棄できない権利であったことは明らかである。実際、それは、一方で、

主の命令による務めであり、新約で司教の職に召されたものに負わされるものであるが、他方では、その権利について言うこともできる。つまり、神学的観点から、すべての受洗者は、洗礼の事実そのものによって、真のキリスト教生活を学ぶことができるために授業と養成を受ける権利をもっている。なお、人権の観点から、すべての人間は、宗教的真理を求め、自由にそれを受け入れる権利をも

っている。つまり、すべての人間は、個人あるいは社会的集団、およびあらゆる人間の権力からの強制から自由でなければならぬ。それで、誰も自分の良心に反して行動するよう強制され、あるいは自分の良心に従って行動するのを妨げられてはならない。

それで、要理教育活動は、時間と場所、公報機関、適当な学習用具の点で、両親、要理を学ぶもの、および要理教師自身に対して何の差別もなく、有利な状況の下で行われることができなければならない。このような権威が、今日は、少なくとも、大筋では、国際的宣言または申し合わせに示されているように、次第に認められていることは確かである。ここに――限られたものではあるが――現代人の大多数の良心の声が聞かれる。しかしながら、この権利は、要理教育を行うこと、行わ

せること、あるいは受けることが制裁を課せられる犯罪となるまでに、多くの国家から犯されている。それで、私は、シノドスの教父たちと共に、声を大にして、このような要理教育の分野におけるすべての不当な差別に対して抗議し、同時に、人間の自由一般、とくに宗教の自由を抑圧する一切の圧制を全く止めるよう関係者のすべてに強く要求する。

優先的任務

第二の教訓は、教会の司牧計画における要理教育の位置に関するものである。教会は地方的なものであれ、普遍的なものであれ、より明らかな成果を上げるかも知れないほかの事業や企画に――要理教育を優先させるだけ、それだけ要理教育が、信者の共同体としての自分の内的生活と宣教の共同体として外的活動とを強化する手段であることを見出す

であろう。今、終わりにさしかかっているこの二十世紀の中にある教会は、自分の使命の最も根本的な任務としての要理教育活動に対する信頼を新たにしよう、神と出来事――これも同じように神の呼びかけであるが――から求められている。教会は、要理教育をよりよく組織し、有資格者を養成するために、努力と労働と物的手段を惜しむことなく、自らの最良の資力、すなわち、人間と精神を要理教育に充てる必要がある。これは単なる人間的打算ではなく、信仰の姿勢である。このような信仰の態度は、必ず答えてくださる神の誠実にもとづくものである。

共通の異なる責任

第三は次の教訓である。すなわち、要理教育は、常に全教会がその責任を感じ、またその任を負わねばならない仕事であったが、これからもそうである。しかし、教会の成員は、それぞれの使命にもとずいて、違った責任を負っている。司牧者は、その職務上、違った段階で、要理教育を促進し、指導し、調整する最高の権威行使する。ローマ教皇は、この分野で最も大きな務めが自分に負わされていることを深く自覚している。この務めは、司牧の心遣いが動機になっているが、それは喜びと希望のもとでもある。なお、それは司祭、修道士および修道女にとっては、使徒職のための恵まれた領域である。次に、別な生活状況において親は特別の責任を負っている。教師、教会の種々の教役者、要理教師その他の公報関係者は――それぞれ異なる程度で――信者の意識形成にまことに決定的役割を果たす。これは、社会自体の生活に影響することは無論のこと、教会の生活に大きな力をもっている。実際、要理教育の問題に専念したあのシノドスの総会の最良の成果の一つは、共通の責任について強く積極的な意識を教会全体とその各部に呼び起こしたことでありう。

(枢機卿 里脇浅次郎 中央協議会発行)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円
 ■一年予約七百二十四円送料七百二十円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

替振郵便 神戸 072393